

合同研究会開催報告

情報システム学会基礎情報学研究会 ネオ・サイバネティクス研究会

2021年3月20日、情報システム学会基礎情報学研究会およびネオ・サイバネティクス研究会 (<https://digital-narcis.org/>) は合同で、連続研究会「情報と創造性」の第4回「デジタル機械情報と意味と価値」をオンライン・ミーティングとして開催した。

連続研究会「情報と創造性」第4回

「デジタル機械情報と意味と価値」

日時：2021年3月20日（土）13時00分～14時45分

於：オンライン・ミーティング（Zoom Meetings を使用）

発表者：椋本輔（鶴見大学／学習院大学）

コメンテーター：佐々木 裕一（東京経済大学）

参加者：34名

研究会の要旨：

本研究会は、連続テーマである「情報と創造性」をめぐる問題の中で、「デジタル機械情報」が我々人間にとって「意味」や「価値」を持っていること自体についての基礎的な考察を試みたものである。

そのために発表者からは、まず「デジタル情報技術」と我々人間＝観察者との関係——「実体」としてはすべからず単なる二値符号の羅列である「デジタル機械情報」がどのような機序において我々人間にとって「意味」をもつのか——についての、基礎情報学／ネオ・サイバネティクスの理論体系に依拠した基礎的考察として、椋本「擬自律性はいかに生じるか」（『AI時代の「自律性」：未来の礎となる概念を再構築する』勁草書房、2019年・所収）における考察を紹介した。

さらに「意味」という観点から人間の制作／創作、具体的にはフリー・インプロヴィゼーションや *musique concrète* といった現代音楽をはじめとする、「単なる音そのもの」や「単なる光そのもの」の表現を目指すような「無意味」を志向した現代芸術と、近現代的メディア技術すなわち情報テクノロジー一般との歴史的な関係・議論を確認した。そこでは逆説的に「逃れ難く意味を見出してしまう我々」の存在が明示的／非明示的にむしろ前提されていたことを指摘し、前記の「デジタル情報技術」と我々人間＝観察者との関係についての理論的考察と接続した上で、「情報と創造性」をめぐる問題についても、デジタルコンピューターを実現基盤とした人工知能＝AIシステムを擬人的／超人的に主体化するような、昨今のいわば「アルゴリズム」に重点を置く議論に対して、むしろ「デジタルデータ」という情報様式（＝デジタル機械情報）がどのようにして我々にとって「意味」を持っているのか、一人称的な次元から社会的・経済的な「価値」の次元に至るまでを連続して捉える考察の必要性を提起した。

そうした考察を進めるために発表者からは、佐々木「ネットにおける集合性変容の予兆と資本主義——ユーザー生成型メディアの来歴と未来」（『デジタルの際：情報と物質が交わる現在地点』聖学院大学出版

会,2014年・所収)や、同『ソーシャルメディア四半世紀:情報資本主義に飲み込まれる時間とコンテンツ』(日本経済新聞出版,2018年)における、インターネットを成立基盤としたコミュニケーションメディアの経済的動態の克明な実例研究を元にした、「デジタル機械情報」とそれをめぐるコミュニケーションに対する様々な「価値」様態の考察を紹介した。そしてその考察結果と、微視的・個体的な次元における「デジタル機械情報」と我々人間=観察者との関係についての発表者の考察とが、基礎情報学における「階層的自律コミュニケーション・システム(HACS)」の理論モデルを紹介することによって理論的に接続・連続したものとして捉えられる可能性を提案した。

コメンテーターの佐々木からは、提案への基本的な同意とともに、「情報と経済的価値」をめぐる知見がさらに幅広く仔細に紹介され、提案を踏まえて基礎情報学/ネオ・サイバネティクス理論体系を採用することが、それらについての理解の深化につながる可能性も端的に示された。

今回を含めた2020年度各回の議論も踏まえ、本連続研究会は引き続き2021年度も開催し、「情報と創造性」についての考察を深めて行く予定である。本研究会についても、基礎情報学研究会を通して、情報システム学会より多大なるお力を頂き、また学会員の方々から多くのご参加を頂いたことに、改めて深謝を申し上げる。

椋本 輔 (ネオ・サイバネティクス研究会) 記

※なお、本連続研究会は、科学研究費助成事業(研究課題/領域番号:20K12553、研究種目:基盤研究(C)、研究期間:2020~2022年度)による共同研究「機械と人間との感性および創造性の異同をめぐるネオ・サイバネティクス的研究」の一環として、情報システム学会基礎情報学研究会およびネオ・サイバネティクス研究会の合同で開催された。